



学校法人
鎌倉女子大学

東南アジアへの教育支援 —ミャンマー昔と今

暑かった夏もそろそろ終わり、秋セメスターの準備にかかる頃、ミャンマーに出張していた坂田映子先生が報告方々帰国の挨拶にきてくれました。先生は、JICA（国際協力機構）から依頼され、そのスタッフとして「ミャンマー国初等教育カリキュラム改訂プロジェクト」に協力するため、今季、開発著しい彼の地を訪れていたものでした。

ミャンマーといえば、もう四十数年も前、祖母が東南アジアのお寺参りをしたいと言いついて、独りで行かせるわけにもいかないものですから、学生だった私が同行しろということになり、数日くっついて行ったことがありました。当時は、国名はビルマ、最大都市のヤンゴンもラングーンといったものです。戦後生まれではあっても、私たちの世代にとっては戦争の記憶はさほど遠いことではありませんし、何と云っても、竹山道雄さんの『ビルマの豎琴』の印象は随分強いものがありましたので、私などは、どうしても昔の名前の方に愛着を感じてしまいます。

祖母と薄暗いマーケットを歩いていたところ、後ろから私の背中を軽くたたきながら、「ミスター、靴のひもがほどけていますよ」、と初老の紳士が日本語で話しかけてきたことを覚えています。立ち止まってお礼をいうと、「戦時中、日本の兵隊さんに教えてもらいました」と。

その後、幾度かの厳しい政変を繰り返しながらも、近年は着実な発展の道を辿っていると聞いています。特に日本のマス・メディアは、弾圧された民主化の旗手アウンサン・スーチー女史、これに対して軍政の影を引きずる独裁体制といった構図で語りたがるものですが、政治は、それほど単純なものではなく、現政権も軍事体制に終止符を打ち、軍政を少しずつ脱却しているようで、企業誘致にも積極的で、日本との交流なども進めながら、慎重に自国の発展のための舵取りをしているように思われます。

これは私の素朴な想像ですが、その背景として、ミャンマーがそれでも「不殺生」を第一戒律とする仏教国であるということと関係するところがあるのかも知れません。そこで、どうしても思い出してしまうのは、悲劇的な死を遂げたベナジル・ブット女史や女子教育の必要を訴えて銃撃されたマララ・ユスフザイさんのイスラム国家のパキスタンのことですが、それはしてはいけない間違った比較でしょうか。余談ですが、学園主の紀子先生のご尊父が高名な仏教学者であったことから、戦後、国賓待遇で旧ビルマを訪問したことがあったと聞いたことがありましたが、元々学者を国賓に遇するといったお国柄なのです。

坂田先生がおみやげに持ち帰ってくれた立派な日本語新聞“Yangon Press”などというものも発行されていることを知り、見れば紙面も充実していて、ちょっと驚きましたが、その1面に栗原富雄という編集長の方が書いた「ヤンゴンの雨と女性には勝てない？男女

格差が少なく女性の進出目立つ」という見出しの、面白い、相当紙幅を割いた記事が載っていました。そこには、こんなことが書かれておりました。

その訳は、「公式の場所では男性が前面に出るが、重要なことを決定する際には妻や母親の意向が反映されるケースが多いからだという。これは王朝時代から定着してきた財産の均分相続や教育に男女差別の少なさなどが要因だという。確かに、この国の職場では男女の賃金格差はほとんどない。大学教授、教職員なども圧倒的に女性が占めている。医者、弁護士なども女性の進出は目覚ましい」と。坂田先生が接触した学校の教職員も、ほとんどが女性だったそうです。日本では遅ればせながら、女性の活躍への期待が官民挙げて語られているわけですが、これを聞くと、むしろ女性の能力及びこれにフィットした職域の可能性として、いろいろ考えさせられるところがありそうです。

教育大学も国内に21もあり、以前立ち上げたベトナム交流プログラムもそうですが、これから教育関係者の来日も増えるそうで、やがて留学生の受け入れを初め、学术交流のプログラムなども考えなくてはならない日もそう遠くなくやって来るのかも知れません。また、最近も国際交流基金が東南アジア10カ国で日本語教育の普及を促進しようと、日本語教師を2020年までに3000人派遣する事業を始めましたが、教育学部の学生諸君の中から、やがてこうした仕事に勇躍挑戦する人も出てくるのかも知れません。

[>前のページへ戻る](#)